書評

丸山浩明 編著
『ブラジル日本移民　百年の軌跡』

名村　優子

本書は二〇〇七年～二〇〇八年度に立教大学ラテンアメリカ研究所が立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）の研究助成を受けて行った単独プロジェクト研究「ブラジルにおける日系移民資料の分析・保存とデジタルアーカイブ構築―移民百年の軌跡」と、プロジェクトの一環として二〇〇八年一〇月に開催された国際会議「ブラジル日本人移民百年の軌跡」の成果をまとめたものである。

二〇〇八年は日本人が移民としてブラジルへの渡航を始めてから一〇〇年にあたり、日本人移民一〇〇周年を記念してブラジル・日本両国で様々な関連事業が開催された。また、百周年を契機として、ブラジル日本移民や日伯交流に関する書籍が両国で出版された。[1]

本書も表題に「百年」を掲げているが、これらの書籍の中にあって特徴的なのは、ブラジル移民研究のみならず、日本移民関係史資料の保存と活用を主要なテーマとしていることである。上記プロジェクトでは、移民一世の高齢化にともない急速に消失しつつある史資料の保存と積極的な活用を目指して、ブラジルおよび日本にある移民史資料のデジタルアーカイブ化を推進した。

このプロジェクトと国際会議の成果を盛り込んだ本書は、日伯両国の、地理学、人類学、言語学、移民研究、外交史、デジタルアーカイブといった多様な分野の研究者・専門家によって執筆されている。

以下に構成を示す。

第一部　ブラジル日本移民研究の回顧と展望

一、ブラジル日本移民・日系「研究」の回顧と展望
　特に人文・社会科学分野を中心にして（森幸一）

二、〔共同討議〕ブラジル日本移民研究における「空白」と「断絶」　研究深化への展望

三、〔共同討議総括〕日本移民研究の「空白」と「断絶」を超えて（三田千代子）

第二部　ブラジル日本移民史・日系社会史

四、日本出移民の歴史地理学的研究　ブラジル日本移民を事例に（石川友紀）

丸山浩明 編著『ブラジル日本移民　百年の軌跡』（名村）

五、ブラジル日本移民の軌跡　百年の「大きな物語」（丸山浩明）

六、ブラジル・カンポグランデ市における日系社会の発展ある初期農業移民の家族史からの逆照射（丸山浩明）

七、ブラジル・アリアンサ移住地の歴史　原生林の開拓と移住地の形成（渡辺伸勝）

八、ブラジル日系社会の特徴と日伯学園創設の意義（宮尾進）

第三部　ブラジル日本移民関係史資料とデジタルアーカイブ

九、外交史料館所蔵ブラジル日本移民関係史料の概要と今後の研究の可能性（柳下宙子）

一〇、移民写真資料のデジタルアーカイブ構築とその可能性（遠山緑生）

一一、ブラジルにおける日系移民写真資料のデジタル化（西山洋介）

一二、〔共同討議〕移民研究におけるデジタルアーカイブの意義と可能性

一三、〔共同討議総括〕デジタルアーカイブと移民研究の接点（入江伸）

各章のうち、一章、四章、六章、七章、八章、九章、一〇章、一一章は国際会議での発表を元に書かれたもので、三章、五章、一三章は本書のための書き下ろしである。また、二章および一二章の共同討議は、国際会議での議論をまとめたものである。

次に、各章の概要を見ていきたい。

第一部では、これまでのブラジル日本移民研究が整理され、研究史上の空白や断絶といった課題が指摘されている。

一章（森論文）は、これまで多様な視角や目的から行われてきた「日本移民・日系研究」について、社会学・人類学分野を中心として通時的に研究史を整理している。

森は「ブラジル日本移民・日系研究」という学問領域が確立されていない中で、日本人研究者の研究だけでなく、広く移民・日系知識人、日系を含むブラジル人、欧米人研究者の「研究」までを視野に入れている。[2] 章末に挙げられた文献数は日本語文献一九四点、ポルトガル語文献七一点、英語文献二六点にのぼり、多彩な研究分野・研究者を網羅した貴重なレビューであると評価できる。

これら「研究」の展開を俯瞰するために、「研究」史上の時代を①一九四〇年以前（政治性を反映した「研究」の時代）②一九四〇～一九五〇年代末（文化変容論からの本格的科学的研究の開始と展開の時代）③一九六〇～

一九七〇年代末（文化変容論的調査研究の多様化とパラダイムの転換）④一九八〇年代以降（日本移民・日系研究の増加と多様化の時代）の四つに区分している。

この時代区分の特徴は、「文化変容論」が時代を分けるキーワードとなっていることであり、文化変容論やアイデンティティ、エスニシティの議論を含めた広い意味での「同化」の問題が、ブラジル日本移民研究における文化人類学分野での重要な関心事であったことが窺える。

二章〔共同討議〕は、日伯の日本移民・日系社会研究者が、ブラジル日本移民研究の現状や課題、将来的な展望について話し合った共同討議の抄録である。司会（丸山）からは、①日本の近現代史におけるブラジル日本移民研究の欠落、②『日本移民〇〇年史』といった既存の移民史とは異なる新たな移民史の必要性、③複数の学問領域の研究者による発展的な共同プロジェクト構築の方法、といった論点が出された。この章の議論については後述する。

三章〔共同討議総括〕（三田論文）は、二章の共同討議を受けて、社会人類学の立場からブラジル日本移民研究を総括している。これによると、日本でもブラジルでも、戦後のブラジル日本移民研究は、社会学及び文化人類学からのアプローチが主流であったが、一九八〇年代以降は日本移民に関する史料の発掘調査がなされ、歴史分野における研究の必要性が高まっている。これらの史料はブラジルの歴史の一部であるが、人材育成や史料アクセスのシステム構築といった点で、日本・ブラジル両国の相互協力が欠かせないと主張している。

第二部では、プロジェクトで収集した写真資料などを参照しつつ、ブラジル日本移民史を概説し、日本移民および日系コミュニティの歴史をたどる。

四章（石川論文）では、日本移民の世界的分布や移民送出の時期区分、ブラジルへの渡航経過や現地での暮らしについて、諸統計や具体的な史料を用いて紹介し、ブラジル日本移民の全体像を歴史地理学的観点から示している。

五章（丸山論文）は、これまでの先行研究を元に、ブラジル移民送出以前の「ハワイ元年者」から笠戸丸移民の渡航、現在の日本へのデカセギに至るまで、ブラジルに渡った日本移民の歴史を通史的に概観している。

日本の研究者の記したブラジル日本移民の通史というのは、現在のところほとんど見当たらない[3]。その意味では、広く先行研究をあつめ、この分量の通史としては詳細な事実を記述している本章は重要な成果であり、実証的なブラジル移民史研究の土台ともなり得るだろう。また、サンパウロ州内の日本人人口の変化や邦人集団地の分布図など、図表や写真が豊富に使われており、ブラジル日本人移民史

の大きな流れを理解する上で参考になる。

五章の概説的な移民史である「大きな物語」に対して、六、七章では個別の地域や家族の日系社会史である「小さな物語」に焦点をあてている。

六章（丸山論文）は、ブラジル中西部の内陸奥地に位置するカンポグランデ市に、沖縄系移民とその子孫を中心とする大規模な日系社会が形成された経緯を探るとともに、現地での聞き取り調査から初期移民の具体的な家族史を明らかにしている。

二〇世紀初頭、ペルーやブラジルへ渡航した沖縄県移民の多くは、農場からの逃亡や流転生活を余儀なくされた。カンポグランデは、こうした初期の沖縄県移民が、破格の高賃金が支払われるノロエステ鉄道工夫として集結し、その後定住化して築いた日本人移住地である。日本政府が初期の沖縄県移民に対してとった渡航制限措置により、沖縄県民のブラジル渡航が呼び寄せ移民に限定されたため、呼び寄せられた近親者が集住し沖縄系移住地ができる一因となったという指摘は、「日本人移民史」に包含しきれない沖縄移民史の独自性を示唆している。また、移民の流転の跡が、ブラジル国内のみならずペルー・ボリヴィア・チリ・アルゼンチンにまで及んでいる事実は興味深い。

一方、コーヒー耕地の契約農から転身した日本移民には日本人集団地を建設する者が多かったが、この集団地の形成に携わった人々に共通する経験が原生林の開拓であった。七章（渡辺論文）では特にアリアンサの初期の歴史に焦点を当てて、移住地建設の経緯と原生林開拓の過程を考察している。

アリアンサ移住地は、出稼ぎ移住ではなく永住を理想とした民間団体によって建設され、他の移住地に比べて中産階級や知識人層が多いのが特徴であった。この移住地建設の初期に行われた原生林伐採について、写真資料とともに紹介されている。

八章（宮尾論文）は日系人研究者の立場から、現在のブラジル日系社会がおかれている実態を踏まえて、近未来のブラジル社会における日本文化の継承とエスニック系コレジオ（エスニックスクール、民族系学校）建設について論じている。

現在の日系人口は一五〇万人と推定されているが、今や明確な日系社会という範囲はなく、都市化、高学歴化、ポルトガル語化、混血化によって日系人もボーダーレス化しつつある。宮尾は、日本移民・日系人が存在したことをブラジルの歴史の一部として残すために、自国文化普及に力を入れるドイツ系移民社会などからその重要性を学び、日系のみならずブラジル社会全体に日本文化を深く伝えるた

めに、日伯学園を創設すべきである、と主張している。

第三部では、プロジェクトの眼目であるブラジル日本移民関係史資料の利用と活用について、移民資料のデジタルアーカイブ構築に関連した実践的な論考が集められている。

九章（柳下論文）は、外交史料館所蔵史料の中からブラジル日本移民史研究のために利用可能な史料を挙げ、その概要と利用への手がかりについて紹介している。

一〇章（遠山論文）では、プロジェクトで作成したWeb上の移民資料デジタルアーカイブであるjp2br.netの構築に至るまでの議論とその意義についてまとめ、技術的な取り組みの背景を紹介している。遠山は、資料をデジタル化する意義を「デッドストックをライブストックに」というキャッチフレーズで表現し、資料のデジタル化による利便性の向上と、ネット上での公開による活用の場の拡大を構想している。

また、ブラジル現地への訪問調査を通じて、日系コミュニティの分散的連合体としての性格を感じ取り、これに適合するアーカイブシステムとして、様々な規模のコミュニティが自力で資料のカタログ化や記録を行えるような、自律分散的な軽量アーカイブシステムの構築を提言している。

この遠山の日系コミュニティに対する把握の仕方は大変興味深い。移民初期の歴史的資料からは、日系コミュニティを集中システム（階層構造の明確な中央集権的システム）的なものとして捉えがちであるが、実際に現地へ行ってみると、現在の日系コミュニティはより分散システム（明確な中心が存在せず、自立的に機能する交点の連合体としてのシステム）的であるように感じる、と指摘している。この認識は、八章で宮尾が述べている「かつて日系コロニアは強い連帯意識を持つ共同体であったが、現在は衰退しており日系人はボーダーレス化しつつある」という認識と共通する部分があるだろう。以上の経緯で構築されたアーカイブはhttp://jp2br.netで公開されている。

一一章（西山論文）は、プロジェクトの一環として行った、ブラジル日系史料館が収蔵する写真資料のデジタル化作業について報告している。

ブラジル日本移民史料館では、写真資料に劣化や、破れ・折り目といった破損が多数見られるなど、適切な写真資料の取り扱いがなされていないのが現状である。西山は写真データベースの構築を進めるとともに、少しでも望ましい写真の保存環境に近づけ、貴重な資料を後世に残すために今後も継続した活動が望まれる、と提言している。

一二章［共同討議］では、ブラジルにおいて日本移民関

係史資料の保存に関わる研究者とデジタル化プロジェクトに関わった専門家が、史資料の置かれている現状とデジタル化の意義、「小さな物語」との関連性、研究プロジェクトの継続性などについて議論した模様をまとめている。

一三章〔共同討議総括〕（入江論文）は、一二章の討論内容を踏まえ、デジタルアーカイブ構築の目的や経緯、デジタルアーカイブやデジタルデータのもつ研究課題を述べた上で、プロジェクトについて総括している。そして、ブラジル移民史資料のように、各地に散在し、失われる可能性の高い資料の場合、これをデジタル化することは、その利用と一定期間の保存を実現する意味で非常に重要である点を指摘している。

以上、各章の概要と簡単なコメントを述べてきたが、最後に本書のもつ意義について、評者の考えを述べたい。

冒頭でも述べたように、本書では史資料の保存と利用が重要なテーマになっており、各分野の研究者がそれぞれの立場から史資料保存の重要性を語っている。その上で、二章〔共同討論〕では、なぜ近現代史の専門家によるブラジル移民研究が欠落しているのか、という点が大きな問題として提起されている。確かに、一章（森論文）のレビューを見るかぎり、ブラジル渡航後の日本人移民・日系人を扱った歴史学研究はほとんど見当たらない。この問いに対する回答として、二章で石川は、移民研究は日本史・世界史という枠組みの狭間に入っているので、十分に研究されてこなかったのではないか、と述べている。また柳下は、歴史的な研究が進んでいないわけではなく、日本の自治体史などでは移民の事例が扱われているが、一方外交史研究ではブラジルを対象とした研究は少ない、と述べている。その上で、「移民史」は国ではなく人が研究対象であるため、外交史としては少し異質であり、人類学的なアプローチが必要だ、としている。

これらの説明により、ブラジル移民研究は近現代史研究の枠組みでは扱いにくい、という研究者側の事情がある程度窺えるのだが、では、なぜこのように歴史研究の不在が問題として論じられるのだろうか。

この疑問を解くヒントは、三章の三田による共同討論の総括に見られる。ここでは日本からの移民送出が終わった一九八〇年代以降、ブラジルでは日本移民史料の発掘調査が進み、近年では記録を残すことへの関心が高まっているとされる。つまり、「記録」が「史料」として残るようになったことで、日本移民・日系社会の歴史的研究の必要性が感じられるようになったのである。

最初の集団渡航から一世紀以上が経ち、日系人の歩みが、その時代を生きた人々から直接経験を聞き取りうるものか

ら、史料を探るものになりつつある現在、ブラジル日本人移民・日系人史は史料に基付いて研究を進める「歴史学的」段階を迎えていると考えられる。移民一世が高齢化し、日系人がボーダーレス化し、日本語史料を読む者がわずかになった現状において、史資料の取り扱いや研究の発展のために近現代史専門家の力が求められている。

それでは、現時点における本書の意義はどこにあるのだろうか。

本書の学際的な性格から様々な観点が考えられるが、評者は、これまで移民研究・日系研究に関わってきた研究者が、歴史研究の重要性に言及し、また移民史資料保存に関して多分野の専門家による共同プロジェクトの一例を示すことで、歴史学研究者に対して「ブラジル日本移民研究における歴史研究の不在」という問題を提起した点が重要である、と考える。

「はしがき」や二章の共同討議で述べられた、「ブラジル移民史を、国家の外で近代化プロセスを歩んだ日本人によるもう一つの近現代史として日本に投げ返す」という壮大な目標をとげるためにも、まずは散逸・破損の恐れがある移民関係史資料を整理し、史料に基付いて歴史を書くという歴史学的方法による日本人移民・日系人研究を始める必要がある。その際、これまでに聞き取りやフィールドワークに基付く属人的な調査研究によって研究蓄積を続けてきた文化人類学や社会学、地理学などの学問領域と提携し、互いの知見や学問的手法を提示しあうような、学際的な研究活動も重要になるだろう。

以上、十分に論じきれないテーマも多く残るが、評者の力不足を陳謝するとともに、多様な関心のもとに本書が読まれることを祈念したい。

（明石書店、二〇一〇年七月刊、三五〇頁、定価四五〇〇円（税別））

注

（1）代表的なものに、ブラジル日本移民史料館・ブラジル日本移民百周年記念協会百年史編纂委員会編『目でみるブラジル日本移民の百年』（風響社、二〇〇八）、日本ブラジル中央協会編『新たな交流に向けて　日本ブラジル交流年・日本人ブラジル移住一〇〇周年記念特集誌』（日本ブラジル交流協会、二〇〇八）、サンパウロ新聞社編『一〇〇年　ブラジルへ渡った一〇〇人の女性の物語』（サンパウロ新聞社、二〇〇九）、三田千代子『「出稼ぎ」から「デカセギ」へ　ブラジル移民一〇〇年にみる人と文化のダイナミズム』（不二出版、二〇〇九）などがある。

（2）この章では括弧つきの「研究」という表現が用いられているが、これは日本人研究者・ブラジル人研究者・欧米人研究者の行ってきた調査活動だけでなく、移民や日系知識人たちが自らの社会・文化などに関して行った調査活動も

丸山浩明　編著『ブラジル日本移民　百年の軌跡』（名村）

含まれている。

（3）これまでブラジル日本移民を通史的に記述した文献には、入江寅次『邦人海外発展史（上）（下）』（一九三六・一九三九）、ブラジルに於ける日本人発展史刊行委員会『ブラジルに於ける日本人発展史（上）（下）』（一九四一・一九四二）、香山六郎編『移民四十年史』（一九四九）、外務省大臣官房領事移住部『わが国民の海外発展』（一九七二）、ブラジル日本移民七〇年史編さん委員会『ブラジル日本移民七〇年史』（一九八〇）、日本移民八〇年史編纂委員会編『ブラジル日本移民八十年史』（一九九一）、今野敏彦・藤崎康夫『移民史Ⅰ　南米編』（一九九四）などがある。また、ウェブ上のコンテンツとしては国立国会図書館の電子展示会「ブラジル移民の一〇〇年」（http://www.ndl.go.jp/brasil/index.html）が詳しい。

（本学文学研究科超域文化学専攻博士課程後期課程）